

## A. 田辺新之助

文久二年一月八日 1862.2.6～昭和十九 1944 年二月二十四日

田辺松坡、名は正守、字は子慎、称は新、新之助、別号に菱花山人。肥前唐津の人。唐津藩士の次男として江戸に生まれ、維新後唐津に戻る。山田忠蔵の廓然堂で和漢学を学び、唐津藩耐恒寮に赴任してきた高橋是清に私的に英語の手ほどきを受けた。唐津伝習所、唐津準中学校に学んだ後上京し、東京大学予備門で普通学を修める。明治十四(1881)年末に退学し、同郷の先輩天野為之らの斡旋で、明治十五(1882)年一月より高橋是清が校長を務めていた共立学校(後の東京開成中学校)の英語・地理教授となり、明治三十(1897)年から校長を務める。開成中学校校長在職中の三十六(1903)年、逗子に第二開成学校(現在の逗子開成中学校・高等学校)を、翌年鎌倉に鎌倉女学校(現在の鎌倉女学院中学校・高等学校)を設立し校長となり、逗子開成は大正二(1913)年まで、鎌倉女学校(鎌倉高等女学校)は昭和九(1934)年までその職にあった。教育における業績は高く評価されている。

一方、上京後、岡本黄石・大沼枕山に漢詩を学び、明治十七(1984)年から晚翠吟社に参加。

「松坡」の号はこの頃、同郷の師である中澤見作(機堂)より与えられた。『日本名家詩選』(脇屋義質編 須原屋茂兵衛 明治十九年)に作品が採録されたことで、二十代半ばで漢詩壇に颯爽とデビューし、晚翠吟社では幹事として杉浦梅潭を助け、向山黄村没後は批正も担当し、明治三十(1897)年からは『毎日新聞』漢詩欄の撰評者を務めた。また、杉浦梅潭、樺山資紀の詩集を編むなど、明治・大正・昭和の詩壇で活躍した。各地の多くの碑・墓誌の撰文なども手掛けている。『小笠原老岐守長行』の編纂委員でもあった。

明治二十七、三十八年頃、鎌倉に居を移し、亡くなるまで鎌倉に住んだが、鎌倉同人会設立(「同人会」の命名、設立趣意書の起草)に関わり、鎌倉市内にある旧蹟保存指導標の撰文にも携わった。また、市内で漢詩の講読会を開き、自ら漢詩会(松社)を主宰し、鎌倉の文化人・政治家・財界人・軍人などとの交流を通じて、清雅な都市鎌倉の文化的発展に大きく貢献した。

間島弟彦との親交から、間島の没後、鎌倉図書館建設を記念して建てられた「間島君旌徳碑」(旧図書館、現「おなり子どもの家こぼと」脇)の撰文に当たった。

昭和十九(1944)年二月二十四日、肺炎により死去。享年八十三。杏庵松坡居士。墓所は鎌倉寿福寺。

戦後、ご遺族より漢籍を中心とした膨大な旧蔵書が鎌倉市図書館に寄贈され、今日「松坡文庫」と呼ばれている。

配、水谷氏鏌(慶応元年十二月二日 1866.1.19～昭和十六 1941 年十一月十五日)との間に三男四女。長男元は文化勲章受章の哲学者、次男至は黒田清輝門下の西洋画家。孫に田辺穰(画家)、野沢謙(農学者)、野沢協(フランス文学者)、曾孫に田辺匠(建築家)、野沢尚(作家・脚本家)がいる。

## B. 松方正義

天保六年二月二十五日 1835.3.23～大正十二 1924 年七月一日

明治・大正時代の政治家。鹿児島城下の下荒田正建寺に薩摩藩士松方正恭の子として生まれる。幼名を金次郎と称し、正作、三之丞、一郎、助左衛門と改名。嘉永五（1852）年から七年間大番頭座書役につき、万延元（1860）年、大守島津忠義に随行して江戸出府を命ぜられる。この年末に同藩士川上左太夫の長女満佐子と結婚。文久二（1862）年には島津久光に随行して京、江戸へ出向く。慶応二（1866）年には藩の軍艦掛につき、軍艦や小銃の購入など藩の軍備強化に奔走し、薩長同盟の促進にも尽力した。明治新政府の成立後は、九州鎮撫使参謀、長崎裁判所参謀、日田県知事などを歴任したあと、明治四（1871）年に大蔵権大丞や租税権頭などに就任。その後、勸業頭や内務省勸農局長など勸業関係の役職を経て、明治十三（1880）年には内務卿、翌年には参議兼大蔵卿に就任した。大隈重信にかわって大蔵卿に就任した松方は、いわゆる松方財政を展開し、紙幣整理と軍拡を強行した。松方デフレとも呼ばれたこの政策は、インフレを終息させることに成功したが、物価の急落を招き、多数の農民が土地を失い、地主制の成立を促進した。明治十八（1885）年の内閣制度発足と同時に大蔵大臣に就任し、その後明治三十三（1900）年まで第二次・第三次伊藤博文内閣の時と、第一次大隈内閣の時の五年ほどを除いて、ほぼ一貫して大蔵大臣の地位にあった。この間、明治二十一（1888）年には内務大臣兼務、二十二（1890）年には貴族院議員となり、内閣総理大臣に就任する（1891～1892、1896～1898）など権勢を誇った。支配層内部に松方閥なるグループが形成され、政府・宮中などに強い影響力を有した。明治三十一（1898）年には元勲に待遇され、明治三十六（1903）年には枢密院顧問官、大正六（1917）年には内大臣に就任し、閣外から明治の元勲として政治に影響力を持ち続けた。

田辺新之助 昭和九（1934）年 鎌倉高等女学校校長退職記念の組写真の一枚



松方正義



### C、松坡、海東侯に陪して那須へ

一、二人の親交は明治二十年代末乃至三十年代初めから

松方正義は書（大師流）の大家であり、文芸にも造詣が深い（号は海東）

政治家松方正義と学校長田辺新之助との関係ではなく、漢詩人・書家田辺松坡と書家・文人松方海東との「文墨の交わり」であった。

樺山資紀が大磯の別邸で開いていた緑雨会などを通じてか？

鎌倉別墅訪海東侯爵賦呈（鎌倉の別墅に海東侯爵を訪い、賦し呈す）

尾聯（第七句、第八句）

緒餘常嗜臨池技 緒餘 常に嗜むは臨池の技

捲起風濤筆力道 風濤捲き起り 筆力道し

『大正詩文』第一卷第一号 1915.11

○緒餘 本業以外の余技。○臨池技 書道のこと。後漢の張芝が池に臨んで書を学んでいると、池の水が真つ黒になったという故事（衛恒『四体書勢』など）による。○適 力強い、美しい。

二、海東侯は鎌倉由比ヶ浜に別荘（鶴陽荘 四千坪）を営み、文学者・画家・書家・文芸愛好家を招き、歓談することを楽しみにしていた。松坡は明治三十七、八年頃に鎌倉に居を移し、しばしば鶴陽荘に招かれる。

### 三、忘年の交

奉輓海東松方公（詩稿 鎌倉女学院蔵）の一節

菲才多年辱知遇 菲才 多年 知遇を辱くし

論心文字有夙因 心文字を論ずるは夙因有り

把臂促膝喚小友 臂を把り 膝を促し 小友を喚び

忘年交当父子親 忘年の交 当に父子の親たるべし

○菲才 非才に同じ。才能の乏しいこと。また、自分を遜っている。○辱 好意を受ける。

○心文字 心。御心文字。「文字」はそのものを婉曲にいうために添えられた語。○夙因 早くからの因縁、前世からの因縁。○把臂促膝 手を取り、膝を交えるさま。親密さを表現する。

○小友 小は自分の側を遜っている語。○忘年交 年齢の違いを忘れた交友。

### 四、大正八（1919）年六月中旬、海東侯と共に、那須塩原千本松の農場（別荘 萬歳閣）へ

連作漢詩「千松苑十二勝」の自注

己未六月陪海東侯。游千松苑。留滞三日。乃擇苑中十二勝。各係以五言四句。一時興到之作。元不足以示大方也。

己未六月、海東侯に陪し、千松苑に遊ぶ。留滞すること三日。乃ち苑中の十二勝を採び、各々五言四句を以て係く。一時の興到りての作。元と足らず、以て大方を示すなり。

『大正詩文』第三卷第九号 1919.9



陪海東侯游千松苑。苑在那須野。侯別墅也。

海東侯に陪して千松苑に遊ぶ。苑是那須野に在り、侯の別墅なり。

滿地青蕪潑眼濃 滿地の青蕪 眼に潑いで濃く

亭亭老樹是千松 亭亭たる老樹 是れ千松

天然麗景排彫琢 天然の麗景 彫琢を排し

雨後薰風促杖筇 雨後の薰風 杖筇を促す

翠色長齊君子操 翠色 長く齊う 君子の操

高標豈受大夫封 高標 豈に大夫の封を受けんや

相公公退道遙處 相公 公を退き 逍遙する処

一洗平生芥帶胸 一たび洗うは 平生芥帯の胸

○青蕪 青く茂った草。○亭亭 樹木などが高くまっすぐにそびえているさま。○齊 ととのう、ならぶ。○高標 高く抜きんでること、転じて高い風格。○大夫封 この時、松方正義は内大臣。○相公 宰相。○公退 公務を終えて役所から退出すること。○逍遙 そぞろ歩き。○芥帶胸 俗塵に塗れた胸、胸に溜まった俗塵。

大正期の千本松農場 多くの羊が飼育されている

左奥が萬歳閣



那須別邸（萬歳閣）

4 明治二十六（1903）年、千本松牧場内に建てられた那須別邸。那須塩原千本松牧場内のこの建物は、床面積三三四㎡の洋館で、一階が石造、二階が木造から成る。翌年、皇太子（大正天皇）が駐泊の際、折からの日露戦争で遼陽が陥落した報が届き、一同で万歳をしたことから「萬歳閣」と呼ばれるようになった。（写真はいずれも松方峰雄氏提供）

## D、鎌倉宮碑

一、鎌倉二階堂の鎌倉宮境内の奥まったところ

建碑は大正十（1921）年

篆額「鎌倉宮碑」 元帥陸軍大将大勲位功二級貞愛親王

撰文 少内史正六位巖谷修（明治六1873年五月）

書 正二位大勲位侯爵松方正義

二、建碑の経緯

- ・ 明治六（1873）年五月の明治天皇鎌倉行幸直後、鎌倉宮についての碑を建てる議が起こり、巖谷修（一六）が撰文までしたが、建碑は沙汰やみとなり、撰文も埋もる。
- ・ 巖谷の没後、遺稿中に撰文が見つかり、松坡は建碑のため奔走する。
- ・ 巖谷と並び明治三筆と称えられた日下部鳴鶴に揮毫を願うのが相応しかったが、鳴鶴は老病で筆が執れない。松坡は海東侯に相談する。

三、田辺松坡の談話

相羽清次『明治天皇鎌倉行幸御事蹟』（1928）

當時多く鎌倉の別荘に居住せられて、土地のことにも何かと心配せらる、松方老侯に、ご意見をうかがいましたところが、公は暫くお考へになりましたが「それは私に書かせてくれまいか」と豫期せざる仰せでありました。尤も老侯は、晩年殊に書道に精進せられて居ることは承知してはみましたが、この揮毫に老侯を煩はすことなどは、毫も念頭になかったことであり、又平生お達者とは申せ、當時八十七歳の御老體でありますので、かような正楷の細字の揮毫に、老侯を煩はすに忍びませんので「それは恐縮致します。誰かお見立て下さいますれば、お名前は拜借だけで結構であります」と申し上げたるも、「いや私に書かしてくれ」との、固いお意氣込みで居らるゝので、「然らばお願い申します」といふことになり、文字の大きさや配置を、私が按排して、老侯に差上げました。（同書 pp.22-23）

この談話からは、二人の交流の様子が判ると同時に、建碑にかける松坡先生の苦勞が窺われ、同時に、海東侯の「誠懇謹嚴なる面目」（同書 p.20）が偲ばれる。



鎌倉宮碑（鎌倉宮）

## E、関東大震災で被災 西瓜で渴を癒す

### 一、被災

#### ・ 田辺松坡

亂橋材木座飛地字中道一四六三番地で被災（詳細不明）。

壁（の一部？）が崩れたが、一家は無事。長男元、次男至は留学中。

#### ・ 松方正義

由比ガ浜の鶴陽荘で被災。家屋が倒壊し、その下敷きになるが、救出される。

### 二、震災直後、松坡は鶴陽荘に駆け付け、海東公の無事を確認する。

奉輓海東松方公（詩稿 鎌倉女学院蔵）の一節

靦面先喜兩無恙 靦面 先ず喜ぶは 兩（ふたり）恙無し

排牆同是偶然免 牆を排し 同に是れ 偶然に免る

此時玉露恩露深 此の時 玉露の恩 露いて深く

西瓜療渴甜於蜜 西瓜 渴を療し 蜜よりも甜し

○靦面 まのあたりに見る。○牆 間を隔てるもの。ここでは壁。○玉露 玉のように美しい露。

### 三、嗤訛伝 「松方死す」との誤報

前掲詩稿の一部

後經三日蜚語紛 後三日を経て 蜚語紛たり

松公遭厄万人怵 松公 厄に遭うを 万人怵る

我獨終始嗤訛傳 我れ独り 訛伝を嗤う

○蜚語 根拠のない噂、デマ。○怵 心配する、悲しむ。○訛傳 間違った言い伝え、誤伝。

四、被災後、海東公は静岡県興津の別邸で静養するようになり、老いも進む。大正十二（1924）年四月三日、松坡は海東公の病床を見舞っており、その三か月後、七月二日、海東松方正義は帰らぬ人となる。

■ 二〇二四年十二月十四日～二〇二五年三月一日

「女学生がみた近代の鎌倉 田辺新之助と鎌倉女学校」（鎌倉歴史文化交流館）

■ 二〇二五年四月 松坡文庫研究会第十回講演会「間島弟彦・愛子と田辺松坡」（仮題）

詳細は未定

松坡文庫研究会 事務局 鎌倉市中央図書館 0467-25-2611

e-mail shohatanabe@gmail.com

※ 松坡文庫研究会の活動の成果の一端は逗子開成中学校・高等学校のホームページでご覧いただけます。

